

## 詩篇 133 篇

## 都上りの歌。ダビデによる

- 1 見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。
- 2 それは頭の上にそそがれた尊い油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。
- 3 それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

「祭で歌われる祈り」の最終篇は、わずか三節の小篇です。イスラエルの民が一つ所に集められ時を同じくしている幸いを歌い上げています。タイトルに「**ダビデによる**」とあり、ある人はイスラエル統一を成し遂げたダビデの喜びの歌だと解釈しますが、捕囚中ばらばらになっていた民が再び集められたと見るほうがこれまで学んできた内容との関連で理解しやすいでしょう。

「**一つになって共に住む**」と言われているように、離散の民がパレスチナに戻り、壊されていた家屋を建て直し、生活の基盤を築き、そしてそのアイデンティティの中心としてエルサレム神殿を再建しました。共に集って礼拝をささげてこそ神の民であることを再確認したのです。「**なんというしあわせ、なんという楽しさ**」と二重に喜びを噛み締めています。私たちにとって礼拝は「幸せ」「楽しさ」の時間となっているのでしょうか。教会もまた人間の集まりである以上、すべてがハッピーであるわけではありません。しかし、礼拝において神と出会う喜びが失われてはならないのです。そして、同じ主を信じる者がその信仰によって共鳴し合う場となるはずで

2 節は大祭司の任職を比喻として取り上げ、かつてその代表者であったレビ族のアロンの名前が出てきます。彼はモーセの兄として出エジプトを輔<sup>たす</sup>け、民をとりなす祭司としての役目を任じられました。「油注ぎ」の儀式は、一般の祭司に対して「振りかけ」られるのとは違い、その香油の量も桁違いに多かったようです。乾燥したパレスチナの気候にあって、その油は心地よいものだったといえます。「**アロンのひげに流れ**」「**その衣のえりにまで流れしたたる**」と、絵画的に神の恵みがこぼれ落ちる様子を描いています。神の民にとっての幸せは神によってもたらされることが強調されているのです。

3節では更にその情景が拡大し、「シオンの山々におけるヘルモンの露」と表現し直されています。「シオン」という語は語源的に「荒地」「乾燥地帯」を意味しますので、そこが水分で潤されるイメージとなります。ヘルモン山は2800メートルもの高山で、山頂は万年雪が常に被り、暖かくなるとその一部が溶け、峡谷から水が流れ出し、それが水蒸気となって周囲の低山の上に露となって降ります。まるで天来の恵みのように乾いた土地を潤す水、それが聖徒の交わりの喜びに譬えられているのです。

私たちの教会生活においても、聖徒が顔を合わせる一回一回の機会を大切にしたい。アロンの頭に注がれた油、ヘルモン山から滴る恵みの露をイメージしながら、この群れにメンバーを集めてくださった主に感謝しつつ、交わりを喜びたいと思います。